

## 書評

## 「温もり」の選択

著者：赤池 学, 藤井 勲 共著

発行：TBSブリタニカ

定価：1,600円（本体価格）

評者：吉田 英生（京都大学教授）

第一著者の赤池氏が先に著した「世界でいちばん住みたい家」の書評において、評者は賛辞を惜しかなかった。その延長線上で大きな期待をもって、本書を読ませていただいたが、今回はその内容に全面的に同意するものではない。

行動力に富む著者らは、国内のみならず海外への取材・調査に基づいて、今後のエネルギー問題を多角的な面から論じる。その筆致は常に歯切れよく魅力的である。しかし同時に、ときとして誤解を招きかねない恐れも内包しているように感じるのは評者だけであろうか。

本書のキーワードを一つ挙げるとすれば、迷うことなく「PEM革命」となろう。最近、注目を浴びているプロトン交換膜型燃料電池の略称であるPEM。ご存じの読者も多いと思うが、カナダのパラード・パワー・システムズ社が開発に成功し、共同研究しているダイムラー・クライスラー社がこれを搭載した電気自動車は、実用化も間近と言われている。確かに、PEMが自動車業界のみならずエネルギー分野に与えたインパクトは大きく、PEMを主軸とする水素利用が、エネルギー研究の一つの潮流になろうとしていることは評者も認めるところである。

著者は言う、「燃料電池は、第1章で述べたような問題をすべて解決し、かつ第一のシナリオ（原発推進のこと）と第二のシナリオ（自然エネルギーへのシフトのこと）のジレンマをも解決する重大な鍵を握っているのである。（100ページ）」と、2次エネルギーとしての水素の供給が問題なくなされるならば、水素エネルギー社会は環境問題の視点から理想であることは今さら言うまでもないことで、PEMの開発はその利用側の有力な候補者が登場したということであろう。しかし、水素供給に関して本書でも若干の記述がなされているメタノールや天然ガスの改質については、当然CO<sub>2</sub>フリーではない。著者らはそのことを十分に理解しているにもかかわらず、「究極のゼロ・エミッションピークル（96ページ）」、さらには「燃料となる水素やメタノールは、天然ガスからも、下水汚泥からも廃棄オイルからも、簡単に作り出すことができる（98ページ）」のような威勢のよい表現が少なからず見出される。

もちろん本書は学術論文ではなく一般市民をも対象としたものであるから、言葉尻をとらえて云々することは必ずしも適切ではないと自戒する。しかし、著者らがPEMを強調するあまりに、付随する問題点への配慮が若干軽んじられているような印象を持った。

エネルギー・環境問題について弱気な絶望に陥ることはいけませんが、「今われわれは完投できるエースのいない状況で闘おうとしている野球チームに似ている」という、ある学者の言葉は、誇張のない正しい状況認識であろうと思う。だから、メンバー全員、総力戦でいく。その意味では、本書で提案された種々の「温もり」は正しいと思う。

## 他団体ニュース

## '99センシング技術応用センター

## 「環境対応技術の最新動向」

〔日 時〕平成11年11月24日(水)10:00~16:40

〔会 場〕住友電設(株)大阪本社会議室

〔内 容〕「総論：空気・土壌環境技術」

「電磁波環境技術」他

〔問合せ先〕センシング技術応用研究会

〒594-1157 和泉市あゆみ野2-7-1

大阪府立産業技術総合研究所内

Tel: 0725-51-2527, Fax: 0725-53-3148